

Annual Report 2023

医学部 臨床実習プログラム（海外） 派遣学生の声

シンガポール国立大学での留学

医学部 6年生

白土 新菜

派遣校:シンガポール国立大学

実習期間:2023年4月3日~4月28日

2023年4月3日から28日までの4週間、アドバンスとクリニカルクラークシップの一環として、シンガポール国立大学(National University of Singapore)に留学させていただきましたのでご報告いたします。

前半2週間は国立大学附属病院(National University Hospital)の脳神経外科で実習をしました。指導医のDr. Teoはとても陽気な方で、脳外科の知識以外にもシンガポールの観光地、日本の文化で大盛り上がりしました。主な実習内容は手術、回診や外来診療の見学です。実際に医療行為はできないため、手術は清潔野での見学でしたが、病棟では簡単な診察を何度かさせていただきました。

シンガポールは多民族国家なので、公用語が英語、中国語、マレー語、タミール語と4つもあります。若い世代や学歴のある人は自分の民族言語と英語の2カ国語を話すことができますが、その一方、患者さんの多くは高齢者あるいは貧しい人であり、その中には英語があまり話せない人も多くいます。先生は隣の医療スタッフには英語で話す一方、目の前の患者さんとは中国語やマレー語で話す、といった、私には難解すぎる場面が何度もあり、シンガポールという国の特色を強く感じました。余談ですが、そういった患者さんは私にもわかる簡単な英語を話してくれること、シンガポール人はニコニコしている人が多いこと、日本人はなぜかウケがいいことなどから、英会話のいい練習相手になってくれました。実際に上手くなれたのかはさておき、ニコニコ話しかける度胸は身につけられた気がします。

シンガポールでは血管内治療は脳神経外科ではなく放射線治療科が担当するため、脳卒中で多忙を極める日本の脳外科医より少しゆとりがあるのではないかなどと失礼なことを思っていました。シンガポールの脳外科の先生方は50時間連続勤務のこともあったそうです。シンガポールでは人口に対する脳外科医の数が圧倒的に少ないそうで、やはり脳外科医が昼夜を問わず奮闘しているのは世界共通なのだろうと思います。

指導医の先生のあり得ない速さの英語に揉まれながらも、シンガポール国立大学の医学生であるShuen Kai, seba, Chufengが私を何度も助けてくれました。この場でも優秀な彼らにありがとうと伝えたいです。

後半2週間は国立大学附属病院の救急診療科で実習をしました。指導医のDr. Ianもまたとても陽気で教育熱心な先生で、非常にたくさんのことを教えていただきました。

一番刺激的だったのはNUS医学生の知識と手技のレベルの高さです。学生のうちに採血や縫合、尿道バルーン設置などを実際の患者さんに行い、自分で問診、診察を行い、先生にプレゼンをします。そこから先生のレクチャーが始まるのですが、その診察の精度とリズムの良さにとっても驚きました。また、担当患者さん以外にも、意欲的に他の患者さんの診察を行い、学生同士で所見や診断について考察しあっていて意欲の高さが年下ながらにとっても眩しく、大変刺激になりました。シンガポールの医学部は5年制で日本より早くに実習が始まるため、NUSの4回生と一緒に実習したのですが、恥を捨てて、私より遥かに優秀な彼らからたくさん吸収することは、とてもいい経験になりました。ひっきりなしに医学生が訪れては何度も診察されている患者さんも、みな医学生たちに快く対応していて、シンガポール人のあたたかさもいいなと思いました。

休日や放課後は、友だちと買い物や観光に行ったり、NUSの医学生とおすすめのご飯を食べに行ったりしました。アジア料理をはじめ、シチリア料理、インド料理など異国ごはんは好奇心を刺激してくれるので、大好きなのですが、シンガポールはそんな私にぴったりの国でした。先述の通り、シンガポールは多民族国家のためさまざまな国の料理があります。しかも観光国であることから、美味しいレストランが本当に多かったです。

医学部 臨床実習プログラム(海外) 派遣学生の声

1ヶ月の海外実習でしたが、留学も一人暮らしも初めてであり、英語も全く自信はなく、出発前はとても不安でした。不安どころか相当過酷な試練になるだろうと覚悟していました。しかし、本当に実りある、実りしかない、人生で一番充実した1ヶ月間でした。確かに言語や知識、意欲において分厚い壁を感じて辛い思いをすることもたびたびありました。しかし、それでも自分はやりきった、楽しかったと思えるのは、シンガポールで偶然出会えた日本人の医学部の留学生たちで、互いにライバルとなり、仲間となり、互いを鼓舞し励ましあえたからだと思います。私とは違う診療科、違う病院で先生や学生に教えてもらったこと、驚いたこと、辛かったこと、喜んでもらったことなどを共有して、彼らの経験を自分のものとして、また逆に私の経験を彼らのものとしてもらうことで、一人で得られることの何倍ものことを吸収できたのではないかと思います。

英語力に関してですが、少しは聞きとれるようにはなりましたが、日常会話がやっとなままで、正直なところ英語力は少ししか伸びていないです。だけどそれ以上に、今回の留学の最高の収穫は、間違いなく、何事もまずはやってみる、始めてみる精神を手に入れたこと、そして仲間に出会って自分の価値や能力を教えてもらったことだと思います。たかが1ヶ月でしたが、これは確実に日本では得られないままだったと思っているし、医師として最新の知見を得るためにも、医学以外にも海外で見たいこと、知りたいこと、食べたいものがまだまだたくさんあるのでそのためにも、英語学習を継続していこうと思います。

最後になりましたが、この上ない発見や刺激となるこの機会をくださった解剖学教室近藤洋一教授、留学のための手続きに細やかにサポートしてくださった国際交流センターの近藤恵先生、中治さん、保健管理室の澤村先生、ずっと応援してくれた私の両親と妹、おじいちゃん、おばあちゃん、とても楽しい時間を作ってくれた心から尊敬できる仲間であるときー、みゆちゃん、和田ちゃん、伴ちゃん、雄大くん、そして本当に本当に良いパートナーだったあずちゃんにこの場を借りて感謝を伝えさせていただきます。

これを読んでいる人はみんな、ぜひシンガポールじゃなくても留学に行ってほしいです。細かいことはあまり考えないで、好奇心でとにかく進んで行って欲しいです。後輩たちのために私にも手伝えることがあれば、私と面識がなくてもぜひ連絡してほしいです。来年以降の後輩たちの奮闘を応援しています！



手術後の先生(左2人)、私、NUS医学生の優秀すぎる Shuen Kai君 手術室にて



親切すぎるNUS医学生のBrenda, Mathew, Grace, Faithと 病院のフードコートにて



面白すぎる指導医のDr.Ianと 救急外来にて



楽しすぎる日本人医学部留学生と マリーナベイサンライズ近くにて

大切なのは、臆せずに飛び込んでみるということ

医学部 6年生

藤井 梓

派遣校:シンガポール国立大学

実習期間:2023年4月3日~4月28日

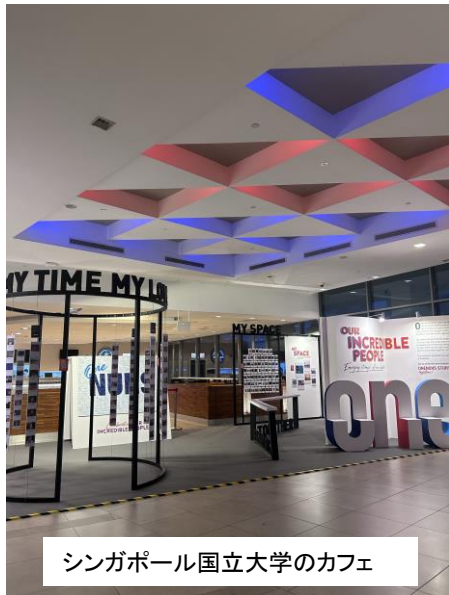
世界を震撼させたコロナウイルスが大分落ち着いてきた2023年春、海外臨床実習の機会を頂けたこと、誠に嬉しく思います。先方との交渉や事務手続きなど、大変お世話になりました。1年生の頃より、部活を引退したら絶対に留学したいと思っていたわたしにとって、今回の経験は額縁に入れて飾っておきたいほど密度の濃い大切な時間となりました。

前半2週間をシンガポール国立大学の精神科、後半2週間を家庭医学科のポリクリニックを回らせていただきました。シンガポールの方の英語は中国語訛りの方が多く、初日はほとんど聞き取れず、周りのレベルにも圧倒され早くも帰国したい思いが芽生えていました。しかし、現地の学生も先生もとても優しく、わたしの実習が終わるまで待ってから大学案内をしてくださったり、交流のためのご飯会を開いていただいたり、会話のスピードを合わせてくれるなどの数々の温かさに救われて、コミュニケーションを取り続けることから逃げずに過ごすことが出来ました。個人的には、特に精神科ではカルテを見ず、患者さんの情報を聞かずに病気を当てるといふ実習参加方法がとても為になりました。聞き取れる英語に限りがあったため、日本でのように患者さんの主訴だけに頼らず、身振り手振りや服装、歩き方や醸し出す雰囲気など背景から判断し、推測する経験を積めたことにとっても感謝しています。日本ではまだあまり流行っていない、ADHDか否かの診断が出来る脳波の機械なども体験する機会をいただきました。また家庭医学科では、こちらがさせてください、と言ったら時間に余裕がある限り色々な診察をさせてくださいました。ただ後ろに座って見るだけではどうしても得られるものは最低限になってしまうため、積極的にコミュニケーションを図り、トライしたいことはちゃんと主張する、という欧米文化を学びました。

母国語が通じない患者さんとの関わりからなどから学べた上記の体験だけでなく、もう一つ印象に残っていることがあります。近年急速に発展してきているシンガポールの医療制度を学ぶことは、医療費削減など数多の課題を有する日本にとって大切なことだ、ということです。恥ずかしながら、この留学に参加するまで、わたしにとっての日々の課題は国試合格のための勉強・マッチングの準備などすぐ側の目標しか見えておらず、日本の医療の課題などについて全く考えていませんでした。しかし、この留学で出会った仲間たちは日本の医療についてしっかりと考えて、現在の問題点などを把握しており、それについてどのように対処すべきかに対する個人の意見を持っている人ばかりでした。研修医になったとしても、1つ1つの実技や何かを身につけることに必死に毎日を消化していただろうわたしにとって、鈍器で殴られた様な衝撃を受けました。一医療者として、まずは問題点を知ること、今まで散々恩恵を受けてきた日本の医療を未来の子供達にも同じように、さらにはもっと良い形で残せるように、疾患に対する知識だけではなく、広い視点で考え続けるようになりたいと思いました。

最後になりましたが、お世話になった国際交流センターの方々、シンガポール国立大学のProf.Roger Ho,ポリクリニックのDr.Amandaをはじめとした多くの先生方、スタッフの方々、そして1ヶ月間共に過ごした日本人留学生の仲間にご場をお借りして心から御礼申し上げます。また、今後留学を考えていらっしゃる方などでもし質問がありましたらいつでもご連絡ください。少しでもお力になれば幸いです。

医学部 臨床実習プログラム(海外) 派遣学生の声



マヒドン大学シリラート病院での実習を終えて

医学部 6年生

上野 愛佳

派遣校: マヒドン大学シリラート病院

実習期間: 2023年4月10日～5月5日

1. 実習先の紹介と留学に参加した経緯

私は2023年4月10日から5月5日の4週間マヒドン大学シリラート病院にて実習させていただきました。シリラート病院とは、タイのバンコクにある国立マヒドン大学の付属病院です。病床数が2000以上あり、タイの最大で最古の病院です。院内は東京ドーム4個分に相当し、大変広いにも関わらず、タイの全地域から患者さんが来院されるとのことで、院内はいつも患者さんで溢れかえっていました。

そして、留学に参加した理由としては、英語に対する苦手意識の克服と海外でしか見られない症例を学生のうちに経験するためでした。今後、外国人労働者の受け入れが進み、日本にいても英語を使う場面が避けられないのではないかと考えています。しかし、私は英語に対する苦手意識があり、医学英語の習得が必要であるとわかっていながらも勉強を疎かにしていました。そのため、留学を機にこの状態から抜け出したいと考えました。また、それと共に海外にしかない症例が今後日本に入ってくることも考えられ、学生のうちにそのような症例に少しでも触れたいと思い、今回のプログラムに参加しました。私は前半の2週間はタイ伝統医学、後半の2週間は血液内科を選択しました。

2. タイ伝統医学について

タイ伝統医学とは、漢方のような考えで、人間は4つの要素から成り立っており、そのバランスが崩れることで体調が悪くなるという考え方です。食事(9種類の味)や運動、Body Contortion(ヨガのようなもの)、マッサージなどによって、そのバランスを修正します。痛みをとることが主な治療目的であるため、主に、整形疾患、脳梗塞後、産後ケアや緩和ケアに用いられるようです。基本的知識を学んでから、マッサージやBody Contortionを学びました。マッサージを実際に先生にさせていただきましたが、疼痛緩和もされ、十分に治療効果を感じられました。日本では、高齢の患者さんは、ポリファーマシーが問題になっています。タイ伝統医学の考えを日本にも取り入れることができれば、痛み止めの摂取量を減らし、少しでもポリファーマシーの解消に繋がるのではと考え、難しいとは思いますが、ぜひ実現したいと思いました。

3. 血液内科について

主な実習内容は、回診と外来でした。症例検討やレジデントのための講義、レジデントによる症例発表に参加することもありました。レジデント主体のものが多く、レジデントへの教育が日本より盛んであると感じました。また、回診は英語で行われており、先生方の英語力の高さに感心しました。回診は日本で見るような症例と変わらないのですが、外来の患者さんは多種多様で本当に勉強になりました。まず、驚いたことは患者さんの多さです。毎日100人程度の患者さんが来院され、多い日には250人の患者さんがいらっしやるようです。中でも、寝たきりの患者さんはベッドに寝たまま来院されます。車椅子の患者さんも含めて、移動困難な方は、診察室に入ることができないため、医師が患者さんのところに出向き診察していました。この光景に対して患者さんファーストであると感じ、見習いたい考えだと思いました。また、日本で見ることは稀なサラセミアですが、サラセミア外来という日があるほどにタイでは患者数が多く、サラセミアに関して多くのことを教えていただきました。サラセミアだけでなく、回診や外来の患者さん1人1人の病状を先生方は、私の反応を見ながら丁寧に説明していただきました。正直、医学英語に関しては、勉強不足のところが多々あったのですが、先生方の説明が丁寧なおかげで、2週目には先生の説明も十分にわかるほどでした。本当に優しくいただき、とても感謝しております。

4. プライベート

院内には複数の食堂やカフェ、スーパー、コンビニがあります。病院の横にはワンランマーケットという市場もあるため、すぐに生活必需品は調達でき、衣食住に困ったことは全くありませんでした。院内には、他にもジムやバスケットコート、テニスコート、プール、図書館、有名な死体博物館、書店などがあります。また、寮が無料で提供され、女子寮は院内にあります。病院は、3大寺院の近くであり、他の観光地もさほど遠くないところにあるため、実習に行くにも観光に行くにも便利な場所でした。そして、日本全国の様々な大学から医学生が留学にきており、私生活では、その子たちと香港からの留学生の子と過ごしていました。普段大阪にいと交流できないような大学の子と話すことは、医学生という共通点がありながらも、自大学とは違うところも多く、新しい発見がたくさんあり、とても楽しかったです。毎日様々なところへ出掛けていたのですが、特に楽しかったのは、ソングランでした。ソングランとは、タイの旧正月に街の至る所で見知らぬ人同士で水を掛け合うお祭りです。童心に帰って水鉄砲を打ち続けました。他にも、パタヤに1泊2日で行ったり、アユタヤや水上マーケットなど多くの観光地にも行きました。また、タイ料理の美味しさと種類の豊富さには、感動しました！正直、タイに来る前はタイ料理が口に合うか不安で日本食をたくさん持ってきたのですが、一切必要ありませんでした。(現地で交流した学生たちにあげて喜んでもらいました。)自分に合ったタイ料理を見つけられるというのもタイ留学生活を楽しむことのできた一因だったと思います。

5. 最後に

実習もプライベートも充実した1ヶ月間でした。当初の目標のうちの1つである英語に対する意識に関しては、最初は文法を守ろうと堅苦しく考えて話すことができませんでしたが、生活するにつれ、文法よりも伝える気持ちが必要であることを感じ、気楽に話してみようと思うことができ、苦手意識は払拭できました。この留学期間中、タイ人、香港人、日本人の3つの人種で混ざって話す機会があり、全員母国語は違うにも関わらず、英語で心を通わせ合うことができ、共通言語である英語を習得することの重要性を改めて感じました。サラセミアといった海外では見ることのできない症例を見たことで、もう1つの目標も達成し、大変満足した留学生活でした。手配をしてくださった国際交流センターの方々、マヒドン大学の留学生担当の方々、滞在中にお世話になった先生方や友人、全ての方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。



9つの味を学んでいる場面



Body Contortionの実習



ソングランでの1枚



血液内科でお世話になった先生方



日本人留学生で遊んだ日の1枚



王宮にて

マヒドン大学での実習を終えて

医学部 6年生

近藤 高寅

派遣校: マヒドン大学シリラート病院

実習期間: 2023年4月10日～5月5日

私は前半の2週間をタイの古式医学、後半の2週間を形成外科を回らせて頂きました。タイの古式医学では西洋医学が待ち込まれる前に実際行われていた医学を学びました。他の実習と比較して大分特徴的であり、普段の実習のように担当医についてまわるのではなく、講義形式での授業でした。実践形式の授業もあり、実際にどのように医療行為としてマッサージが行われているかを自分たちが受ける形で教えて頂きました。その他タイで古くから治療行為に使われてきた薬草を大学の敷地内で育てており、その薬草を一つ一つ効能や名前とともに歩きながら紹介してもらった授業もありました。朝は9時半からで午後は13時半からでした。

形成外科では月曜日と金曜日に外来見学、火曜日、水曜日、木曜日は手術見学でした。自身が希望すればカンファレンスや回診からの参加も可能でした。外来見学ではとにかく患者さんの数が多いため、担当医はひっきりなしに診察や治療を行っていました。合間合間に英語で簡単な説明はしていただけますが、自分で何か質問を患者ごとに考えておいたほうがより多くの情報を話してもらえます。手術見学では形成外科の手術にあるものはどれも好きなものに見学に行ってもよかったです。手術で清潔にする際、清潔のエプロンが布できており、洗濯したものを使い回しているのが印象的でした。

一ヶ月を通して日本に居ただけでは決してできない経験を色々させて頂きました。形成外科ももちろんよかったです。次選択する人にはタイの古式医学を選ぶことを強くお勧めします。タイでしか得られない貴重な経験が得られました。



授業で実際に先生からマッサージを受けけている様子



授業で嗅ぎ薬を作る様子



タイの遺跡アユタヤ



院内の薬草園を案内してもらっている様子



タイの遺跡アユタヤ

国立台湾大学での臨床実習を終えて

医学部 6年生

石井 綾弥子

派遣校:国立台湾大学

実習期間:2023年4月3日~4月28日

Surgeryにて4週間実習させていただきました。

前半2週間は脳神経外科でした。左から二番目が脳神経外科で指導医だったDr.Wangです。彼のオペチームと研究室の交流会で、日本料理をご馳走になった時の一枚です。彼は友人との飲み会にも誘ってくださり、彼の友人を通じて、たくさんの台湾の方と交流を持つことができました。医療関係者の方々だけでなく、異職種の方達とも出会う機会に恵まれました。実習内容には手術見学、外来見学、プレゼン発表がありました。手術見学では、先生から出される問題についてフランスからの留学生や台湾大学の学生と議論していました。外来見学では、中国語が分からなかったので翻訳機を大いに利用しました。

後半2週間は形成外科でした。指導医だったDr.Huangと大学の前で記念に撮った写真です。彼が連れて行ってくれた台湾料理屋さんの食事は1ヶ月の滞在中で最も美味しく、とても印象的です。実習では、興味のある手術を自由に見学させていただきました。再建手術では深夜をまわりながらも皮弁採取部の縫合など実践できました。また、先生方は術式など英語でとても丁寧に解説して下さり、とても勉強になりました。

4週間の実習で、手洗いの方法やガウンの種類、手術室の環境など文化の違いを実感しました。写真は手術室での一枚です。特に印象的だったのは手術フロアには無料弁当やウォーターサーバーがあることです。手術に集中するための環境が整っているなと感じました。



台湾の友人の誕生日パーティーでの写真です。国立台湾大学から大阪医科薬科大学に交換留学生が来ており、彼らやその友人達とたくさん観光もしました。写真は十份を訪れた際に国試合格祈願を書いたランタンです。それぞれの志望診療科に関する臓器を描きました。川沿いが整備されていて、公園やベンチなど多く、夜景を眺めながらよくお酒を飲んで語り合ったのも懐かしい思い出のひとつです。



国立台湾大学臨床実習を終えて

医学部 6年生

安井 輝

派遣校: 国立台湾大学

実習期間: 2023年4月3日～4月28日

私は国立台湾大学附属病院で4週間の臨床実習をさせていただきました。
前半の2週間はFamily Medicineを回り、後半の2週間は消化器内科を回らせていただきました。

まず、Family Medicineですが、日本ではあまり馴染みのない診療科であったことから興味を持ち選択しました。Family Medicineでは生活習慣病や呼吸器感染症、尿路感染症といった common diseaseを診療している点や原因不明の病気の患者さんが最初に受診し専門科へ紹介するといった点から日本の総合診療科に近い診療科であると感じました。しかし、国立台湾大学附属病院では緩和医療もFamily Medicineの医師が行い、大学病院であるにも関わらずワクチン外来や旅行者外来といった日本の町のクリニック的な役割も果たしていました。また医療保険制度が日本と同じく整備されており、大学病院で受診する際に紹介状や追加料金を必要としないため、外来で午前中だけでも約50人の患者さんが受診しており非常に多忙な診療科だと感じました。私が驚いたのは、それだけ多くの患者さんを診察するのに1人1人に費やす時間が長いということです。1人あたり10分はしっかり診察しており、どの医師も患者さんの訴えに対して真摯に向き合っていました。私が最も印象に残っていることは、隣人がわざと窓を開け大声で叫んでくるという隣人に対する苦情のような主訴で来院した患者さんです。外来ではそのような患者さんにも真摯に話を聞き、解決策を提案する姿が印象に残っています。先生方は医師と患者の信頼関係が何よりも大切と仰っていて、実習を通してそれを目の当たりにすることができました。しかし一方で患者が多い分、診察の効率化が求められるということであり、次に診察する患者が同じ診察室で待機していたり、患者さんの情報が院内の至る所で議論されていたりと患者個人のプライバシー保護の意識の面で日本と異なり違和感を感じる場面もありました。他には病棟回診やカンファレンス、訪問診療を見学させていただきました。病棟回診やカンファレンス等は基本的に中国語で行われており理解するのが難点でしたが、親切な指導医の先生や学生が隣に座って英語で翻訳してくださりなんとか理解することができました。訪問診療や緩和病棟では終末期の患者さんの今後の方針について、家族さんとの話し合いにも同席させていただきました。医師という職業は病気を予防・治療するイメージがありますが、先生方の患者さんの人生の最後に真摯に向き合っていく姿には感銘を受けました。

後半の2週間で選択した消化器内科では、基本的に内科合同ミーティングやカンファレンス、病棟回診に参加させていただきました。内科合同ミーティングは週2回消化器内科だけでなく内科が合同となって行われるミーティングで、先生が自身の研究を学生や他の先生方に発表するといったものでありました。中国語で行われていましたが、スライドは英語であることが多く、ある程度理解することができました。このミーティングでは学生だけでなく先生自身も発表の練習となる良い機会であり、日本ではあまり見られない光景でとても新鮮でした。台湾ではHBVのキャリアがアジアでも有数の多さとなっており、中年以降の人はワクチンを打っていない世代の人であったため、入院患者では肝炎や肝細胞癌患者が多数を占めていました。このように文化や気候、医療の歴史の違いによって国ごとに病気の罹患率が変わると実感しました。また、日本の大学病院は高度な医療を提供する場であるのに対して前述の通り、台湾の大学病院ではすべての人がアクセス可能な病院として位置づけられており、医師の技量だけでなくこれらの医療制度の違いによる病気の治療成績などにも関心を持つことができました。

医学部 臨床実習プログラム(海外) 派遣学生の声

今回の留学では実習で台湾の医療を学べただけでなく、日本の他大学の学生や他国の学生、台湾の学生と毎日過ごし、異文化やその人その人で違った価値観など様々な刺激をもらえました。台湾では中国語が公用語ですが、台湾の学生や先生は英語を話すことに慣れており、他国の学生も当たり前のように数ヶ国語を話すのを目の当たりにして自身の非力さを痛感するとともに、より一層これからも英語力を向上させていこうという気持ちになりました。台湾の医療を体験して日本との違いや、それぞれの国で優れている点など学ぶことができただけでなく、他国の学生との交流を通してたくさんの友達を得ることができたことも一つの成果であると感じました。

私は台湾を訪れたことがなく、アジア圏で日本と近く、昔から行きたかったという漠然とした理由で留学先を台湾に決めましたが、どの台湾の方々も優しく、本当に毎日が新鮮で楽しい日々であったため、行って良かったと感じます。

今回の留学の経験を活かして自分の理想とする医師像に近づけるよう精進します。私自身、苦勞した事や反省すべき点多々あり偉そうな事は言えませんが次年度以降留学を考えている後輩達に伝えたいこととしては、とりあえず積極的にコミュニケーションを取ることだと思います。どれだけ拙い英語であってもボディランゲージ等も駆使して伝えようとする意志がなによりも大切で、今回の留学を通して行動力やコミュニケーション能力が最も向上したと実感しております。不安な事もたくさんあるとは思いますが、この留学で必ず人として成長できると思いますので、是非とも挑戦してみてください。



Family Medicineの先生方及び一緒に回っていた学生と



Family Medicineで自己紹介プレゼンをしている時の写真



最終日に正門前で台湾の学生と他大学の学生との集合写真



台湾の学生とのホームパーティの時の集合写真



最終日の夜に台湾の学生と他大学の学生とのパーティの集合写真

国立台湾大学での留学を通して

医学部 6年生

藤田 燦

派遣校: 国立台湾大学

実習期間: 2023年4月3日～4月28日

私は国立台湾大学附属病院の交換留学プログラムに参加させていただきました。国立台湾大学は、日本統治の時代に日本の7番目の帝国大学として設立され、現在でも歴史ある建物がそのまま使われています。大学の近くには国家元首が執務する総統府をはじめとした多くの官公庁が立ち並んでおり、異国情緒あふれる街並みを歩いて通学していました。

私は初めの1週間を脳神経外科、次の1週間を形成外科、最後の2週間を整形外科で学ばせていただきました。全て外科系でしたので、外来や手術の見学が主なスケジュールでした。台湾大学には信じられないほど多くの患者さんがおり、外来では1人の先生が60人ほど受け持っていることもあります。カルテは英語で端的にまとめられており、かなり効率よく外来が行われていました。患者さんとのコミュニケーションでは中国語が使われます。そのため、診察の内容は一緒に見学している5年生の台湾大学の学生に尋ねて、通訳してもらっていました。また、学生は大学のネットワークを使えば自身のiPadでカルテを閲覧することができるので、症例について疑問に思ったことは学生にきいて調べてもらい、一緒にカルテを読んで勉強していました。カンファレンスでは英語が用いられることも多く、中国語ができない私でもある程度理解することができました。

脳神経外科では初日にmyelopathy vs radiculopathyというテーマでパワーポイントの発表をする課題が出されました。英語でレポートを書くのも発表をするのも初めてのことで私にとっては難しい課題でしたが、仲良くなった現地の友達に相談すると快く英語の表現なども教えてくれて、課題を完成させることができました。これは自分の成長と大切な思い出の一つになりました。手術は、脳腫瘍の切除、脳動脈バイパス手術が多く行われていました。手術棟には無料のお弁当が用意されており、そこで昼食をとることもあれば、学生たちと病院の地下のフードコートに行き、おすすめしてくれたものを食べたりしていました。

形成外科では、口腔癌の再建、胸郭再建、火傷による瘢痕拘縮の治療など、様々な手術を見学することができました。緊急手術も受け入れており、救急で運ばれてきたリストカットの症例では私が興味のあるマイクロサージャリーを用いた手際の良い縫合がなされ、非常に興味深く、夜中まで手術を見学させていただきました。初めて見る症例や手術法ばかりで本当に楽しく学ぶことができました。手術中は先生が、疾患の診断法、どのような縫合を選択するのか、ここでは何針縫うか、などの手術の詳細な内容、そしてその理由まで細かく教えてください、理解を深めることができました。通常の疾患と別に、Center for Human Appearanceという外見に関連する問題を専門としたセンターがあり、そちらも見学させていただきました。そちらでは、忙しい中でも患者さんとじっくり話して治療方針を決定されていたのが印象的でした。また、縫合の練習がしたいことを伝えると、豚の足を用いた縫合実習にも参加させていただくことができ、縫合のポイントをじっくり教えていただきました。

整形外科では、人工股関節置換術、頸椎ヘルニア、橈骨骨折、手根管症候群の手術など、今までの実習で見たことのある手術を見学することができました。その分、日本との違いが分かることが多く、使用する器具や切開の位置の違いや、関節内を水ではなくイソジンで洗浄していることなど、面白い気づきが沢山ありました。手術件数がとても多く1日に何件もの手術を見学できる環境で、本当に充実した実習となりました。また、お世話になった先生方には食事会にお誘いいただくこともあり、美味しい台湾料理や日本料理をご馳走になりました。

医学部 臨床実習プログラム(海外) 派遣学生の声

1ヶ月を国立台湾大学で過ごして、この大学に留学させていただけて本当によかったと思いました。国立台湾大学は学ぶための環境が整った大学です。台大病院は2400の病床を持つほか、児童病院でも実習が行えます。先生方の熱心な教育のもとで、優秀で積極的な学生にも沢山助けられ、のびのびと学ぶことができました。留学先をまだ考えている人には心からお勧めします。ただ、どの診療科を選択しても、まず自分の学びたいことや興味のあることを伝えることが1番大事だと思います。そうすればきっと大きな経験を得ることができる大学だと思います。国立台湾大学は、アメリカ、フランス、ドイツ、香港など他国からの留学生も多く、本当にかげがえのない友達と出会うきっかけも与えてくれました。放課後は、実習を通して仲良くなった学生とスイーツを食べに行ったり、夜市で買ったご飯を川辺で食べたりしました。休日にも台湾の友達が有名な観光地や、現地の人だけが知るおすすめ場所に連れて行ってくれました。色々な国から集まった私たちは、自国と各国の医療の違いや、将来どんな医師になりたいなどを語り合うこともありました。留学の準備として、英語の勉強だけでなく日本の医療システムや他国との違いについて知っておいてもよいかもしれません。そしてほとんどの時間は他愛もない会話で盛り上がり、本当に楽しい日々を過ごしました。努力家で医学への熱意を持つ彼らに出会えたことが、これからの私の学習意欲を高めてくれたことは間違いありません。

最後になりましたが、今回の留学におきまして、ご高配、ご支援を賜りました国際交流センター、PA会、国立台湾大学の皆さまに心から感謝申し上げます。この1カ月の大きな経験を励みに、これからも良い医師になるべく日々邁進してまいりたいと思います。このような貴重な機会を与えてくださり本当にありがとうございました。



国立台湾大学臨床実習感想文

医学部 6年生

酒井 信幸

派遣校: 国立台湾大学

実習期間: 2023年4月3日～4月28日

<はじめに>

この度は私たち学生のために、手厚い配慮をしていただき誠にありがとうございました。おかげさまで学生全員が実りある実習をすることができました。教授の先生方、国際交流センターをはじめとしたスタッフの方々に厚く感謝申し上げます

<実習について>

実習は2週間ごとに希望の各科にわかれて行き、2科2週間ごとの合計4週間の期間実習を行いました。基本的には日本で行うような実習と似ていました。大抵は英語でコミュニケーションを取りますが、カンファレンスなどは中国語でおこなわれました。私は麻酔科と整形外科を選択しました。

<麻酔科実習について>

最初の2週間で麻酔科の実習をまわらせていただきました。私の指導医が有給休暇をとっていたので、指導医が毎日かわりましたがそれぞれの専門にそって指導してくれました。麻酔科では気管挿管、マスク換気を主に教えていただき実際に生の患者さんに何度もそれらの手技をさせていただきました。自大学附属病院では一つの手術室に対して一人の麻酔科がいるイメージでしたが、NTUHでは複数の手術室を一人の麻酔科で管理するので一つの手術室で麻酔導入が終わっても次に手術室へと次々移動しては麻酔をすることが続くので大変忙しい印象をもちました。その他でブロック麻酔、小児麻酔など幅広く見させていただいて非常に良い経験になりました。お昼ご飯をすぐ食べないといけない日がおおくて弁当を5分以内で食べた日々が続いたのはいい思い出です。

<整形外科実習>

後半の2週間で整形外科の実習をまわらせていただきました。整形外科は希望者が多く、他の学生と回ることが多かったです。私の場合は、香港からの留学生、自大学の藤田さんと一緒に主に手術見学を回りました。基本的に日本で見ることができるような症例ばかりでしたのでだいたい何をしているかなどはわかっていました。指導医の説明もありより深く手術について理解が深まってよかったです。整形外科のタームで一番思い出に残っているのは指導医の先生方が学生を台湾の伝統的な料理が味わえるレストランに連れて行ってくれたことです。外国の整形外科の実情ややりがいなどをお話しながら、おいしい料理を食べて非常に楽しかったです。



〈生活、休日編〉

移動について、基本的に私の場合はレンタサイクルを使って学校だったり、コンビニに移動していました。安くて速いのでとても重宝しました。レンタサイクルサービスを使って、飲み会やバスケットボールを現地の学生としいったことが非常に鮮明に覚えています。そういった飲み会やスポーツをするところ、観光名所に連れてくれたので週末の土日は実習にある平日よりも忙しかったのは大変いい思い出です。そのような場で日本人学生だけでなく、他国の留学生との交流や国立台湾大学の違う学部の学生と交流することができました。最終日にプレゼントをくれたり、farewell partyを開いてくれたりして、感銘しました。

〈後輩へのアドバイス〉

英語でコミュニケーションをとるには、かなり時間を要します。もし、時間があるなら勉強してからいくといいと思います。現地についての姿勢が大事だと思います。勇気はあるけど指導医にいろいろ聞いたり、現地の学生とごはんを食べにいたり、積極的に外国人とコミュニケーションをとるようにすれば、実習自体も楽しくなっていくと思うのでぜひ、挑戦の心をもって取り組んでください。



台北医学大学萬芳醫院での臨床実習を終えて

医学部 6年生

久保田 帆南

派遣校: 台北医学大学

実習期間: 2023年4月3日~4月28日

私は2023年4月3日から4月28日まで台北医学大学萬芳醫院で臨床実習に参加させていただきました。台北医科大学は1960年に設立された私立の医科大学で、台北101から徒歩10分ほどの距離にあります。附属病院は、台北医学大学附属病院(Taipei Medical University Hospital)、萬芳醫院(Wan Fang Hospital)、雙和醫院(Shuwang Ho Hospital)の3つから成り立っており、私は萬芳醫院の救急科と脳神経外科にて実習を行いました。

基本的に診察は中国語で行われていますが、カルテは英語で記載されており、カンファレンスのスライドにも英語が使われていることが多かったです。診察内容やカンファレンスの内容など、中国語で理解できないところを先生や学生が簡単に英語に訳してくれるため、中国語ができなくても特に困ることはありませんでした。

最初の2週間は救急科を回りました。8時から17時までの実習で、基本的に診察している先生の後ろで見学する形でした。救急科を回っている学生の班に混ぜてもらっていたため、学生が患者さんの診察をする際や、心電図を取る際には一緒に参加させてもらいました。カンファレンスやレクチャーもあり、カンファレンスは中国語で行われましたが学生が英訳してくれたため助かりました。日本とシステムの違いもあるようで非常に患者が多く、診察前にトリアージされていたのが印象的でした。他、ICUの見学やエコーの授業などもさせていただき、日本ではあまり使っていない機械や、日本とは違う制度を知ることができました。最初数日は英語に慣れていないこともあり、不安が大きかったのですが、台湾での実習ではタブレットやスマートフォンを触ることができたため、その場で検索して覚えていくようにしていくと段々慣れていきました。レクチャーの一環で、学生が論文の内容を発表する抄録会があったのですが、私のために急なことにも関わらず英語で発表してくれ、学生の英語力と対応力に尊敬の気持ちに溢れていました。台湾では医学を母国語で学んだ後英語で学ぶようで、スラスラと英語を使いこなしていて、日本語のみでの勉強にヒィヒィ言っている私にとっても良い刺激になりました。また、実習時間は長いもののお昼休みも少し長めで、病院近くの小籠包屋さんで食べてから、タピオカを買って帰り午後の実習に持ち込む、なんて台湾感溢れる生活を送ることができました。

後半2週間は脳神経外科を選択しました。脳神経外科では、担当の先生のチームに配属され、その先生のオペ見学やカンファレンスの参加を行いました。オペ見学では、自大学で見たことのないクリッピング術や、脊椎の圧迫骨折のセメント療法、脊柱管狭窄症の除圧術、脳腫瘍の生検や、髄膜腫の手術など様々な手術の見学を行うことができました。あと残すは閉頭のみ！というところまで来て先生がお昼ご飯休憩を挟み手術が一旦休憩になる、なんてことに驚いた日もあったものの、自大学と使っている機械や手術の違いや、清潔の認識の違いなどを知ることができとても面白かったです。また、実際患者さんにする機会はなかったのですが、空き時間には一緒に回っていた学生と神経学的診察の練習もしました。救急科に比べ、フリータイムがあったため、午後にカフェに行ってみたり、当日の朝に急に1日お休みになった日には1人で少し遠出して温泉に行ってみたりと、実習と自分の時間をどちらも取れた2週間となり充実していました。

医学部 臨床実習プログラム(海外) 派遣学生の声

休日は、土日平日の放課後ほぼほぼ予定を埋め尽くしていました。放課後には、一緒に実習をしていた現地の学生が火鍋とオシャレなバーに連れて行ってくれたり、カラオケや夜市に行ったりと楽しく過ごしていました。また、土日には台湾大学の学生や、日本の他の学校から来ていた学生とも集まって少し遠出したり、ピクニックしたり、リバーサイド飲みをしたりと本当に楽しく過ごしていました。台湾で出会った人たちは、1ヶ月という短い期間だったけれど信じられないほど仲良くなれたし、かけがえのない出会いの連続だったと思います。実習での学びはもちろん大きかったです。台湾での人との出会いが私にとってはとても大きく人生の宝物になったと思っています。大学生の間に、この1ヶ月を過ごせた経験は一生忘れません。病院実習と放課後と土日のおでかけと、めまぐるしく1ヶ月がすぎていき、本当にあっという間の時間でした。

最後になりましたが、今回の海外実習をさせて頂くにあたってお世話になった国際交流センター、台北医学大学のすべての方に心から感謝申し上げます。このような貴重な機会を与えてくださり本当にありがとうございました。



救急科実習メンバーとエコーの練習



ギブス巻き練習



脳外科実習の学生と最終日に病院前で



リバーサイド飲み

1ヶ月住んだ部屋から見える台北101
お気に入りの景色です



台北医学大学での実習を終えて

医学部 6年生

城野 遥

派遣校: 台北医学大学

実習期間: 2023年4月3日～4月28日

今年の4月、私はこの、台北医学大学附属病院(Taipei Medical University Hospital: TMUH)で実習をさせて頂きました。1ヶ月間海外で暮らすということ、そして異国の地で病院実習をさせて頂くこと、そのどちらも私にとって初めてのことだったので、台湾に到着した日は本当に、緊張半分不安半分といった感情でした。恥ずかしいのですが当初、本気で「海外の医療現場を見せてもらって、海外と日本の違いを知ってもっと世界的な視野をもつんや……！」と思って勉強方面の感情全開で来ていたので、実際、毎日がこんなに楽しくて、刺激的で、感動の連続なんだということに驚くばかりでした。

今はだいぶ落ち着きましたが、帰ってから1週間ほどは、台湾での生活を思い出してセンチメンタルになって泣いてました。鉄は熱いうちに打てというように、心が一番熱い内に感想文を書き上げたかったのですが、帰国後の流されるような生活と、まとまらない思考のせいでなかなか筆を取ることができず、こうして締切直前になってようやく書き始めた次第です。

台湾で撮った2000枚を超える写真の中で、私にとって非常に思い出深い写真を選べと言われたら、全部ご飯の写真になってしまいます。それは私が特別食いしん坊だからとかではないです。台湾で学んだことはたくさんありますが、その内の1つが理由だと思います。

①美味しいご飯を誰かと一緒に食べられると、QOLが爆上がりすること。

私はこのことを、実習で一緒になったTMUの学生さんから教えてもらいました。

最初の2週間、私は救急科(Emergency Department)を回りました。TMUHの救急科は基本8am(時には7:30開始)～5pmで実習がある、いわゆる忙しい科です。実習が始まった当初は、私は台湾の医学教育のレベルの高さに衝撃を受けてばかりいました。台湾の病院では当然、患者さんの診察や生徒への説明は全部台湾語でやります。ですが、台湾では医学は英語で学ぶのが普通らしく、先生も生徒も非常に英語が堪能で、カルテも全て英語で記載されていました。台湾の先生方や生徒は非常に優しく、レクチャーでも外来見学でも、台湾語の全くわからない私にその都度英語で説明をしてくれました。私は英語でdiscussionすることが上手くないので、それに対して中々いい返事をすることができず、歯がゆい思いでいっぱいでした。

自分の英語力の至らなさや医学的知識不足を実感すると共に、わざわざ英語で2度目の説明をさせてしまうことに対して、「なぜ私は台湾で医学を学ばせてもらっているのに、台湾語を少しも話せないんだろう……」と申し訳なく、そして今まで学ぼうとしてこなかったことを恥ずかしくも感じていました。そんな、今後の課題や勉強すべきことばかり見つけたり不甲斐なさを感じる日々の中でも、学校に行くのが楽しかったのは、毎日お昼ご飯と一緒にいってくれる学生さん達がいたからです。

台湾では噂に聞いていた通り外食産業が盛んで、大学の周りにはたくさんの飲食店やドリンクショップが立ち並んでいます。大医のように、お昼休みの時間に余裕がある時は学生は外に食べに行くことがほとんどです。救急科を前半で回ったのは私にとってとても幸運なことで、実習初日のお昼、先生と一緒に実習していたTMUの学生に「彼女は注文が難しいだろうから、お昼ご飯に連れて行ってあげて」と言ってくれました。そしてさらに幸運なことに、その日一緒だった学生さんはとても親切な子で、それから毎日、私を色々な種類のご飯屋さんに連れて行ってくれました。

ある日のお昼ご飯で、私はその子に「私は台湾語を全然話せないのに、いつもご飯に行ってくれてありがとう」と伝えたことがあります。同じ言語を使う学生とご飯に行った方が絶対会話も楽で、意思疎通に苦労することもないだろうと思って申し訳なかったし、それでも一緒に時間を過ごしてくれることを私はいつも、とてもありがたく感じていました。でもそれに対して、その子は笑いながら「Harukaはせっかく台湾に留学に来ているんだから、1人でご飯を食べるべきじゃない。1人で言葉の通じない場所に留学に来るのは心細いことだから、ご飯に連れていくくらい当然のことだよ。この辺りには沢山の店があるから、毎日違うご飯を食べに行こう」と言い、その①を私に教えてくれました。

その言葉を聞いて、私はとても心が熱くなると同時に、その考えに非常に感銘を受けました。これは他の台湾の学生さんとも話して気づいたことなのですが、台湾の人はほぼみんな同じような考えを持っています。「言語の不自由な留学生を現地の学生が支えるのは当然のことだ」ということと、「せっかく台湾に来てくれたのだから、楽しい思い出作ってほしい」ということです。

日本では、個々の意思を尊重したり、1人の時間も大切にしたりと、積極的に人(特に留学生)と関わろうとする人が少ないように感じます。それはそれで大切なことですが、留学生は使用言語の異なるグループに関わることに気後れしてしまうものであるし、そのような雰囲気の中で孤独を感じてしまうのではないかと思います。私自身、異国の地で時間を一緒に過ごしてくれる人がいることがこんなにも嬉しくて、安心できることだとは思いませんでした。

②慣れない環境に来た時に、一緒に遊んでくれる人がいてくれるのはとても有り難いということ。

台湾で出会ったみんなと過ごした時間から学んだことはまだまだたくさんあります。それは、台湾の文化であったり台湾で流行っているネットミームであったり、usefulな台湾語であったりスラングであったり。台湾のご飯は全部安くて美味しいということを知りましたし、自分が他国や世界のことを知ろうとしなかったこと、自分や自分の国について知らないことがこんなにあるということも知りました。楽しい1ヶ月は短く感じますが、本当はとても長いので全てのことを書き切ることにはできません。

ですがその中で最も感動したことを挙げるのであれば、英語を学ぶ本当の意味は「使う言葉の違う人同士がコミュニケーションを取れるように」だったんだなと気付かされたことでしょう。それはこの、台湾語と日本語という、異なる言語を母国語とする人間が、英語という共通言語でお互いの気持ちを伝え合おうとする、この環境だからこそ実感できたことだと思います。

今まで私の経験した留学は、全て語学留学だったので、私は英語圏にしか行ったことがなく、私にとって現地に住む人々は「英語の先生」でした。私は会話から、ナチュラルな英語表現や言い回しを学ぶことばかりに気を取られ、話す時も自分の英語が合っているか間違っているかばかり気になってしまい言葉数も少なくなってしまう、本当の、友達同士の会話というものができていなかったように思います。でも台湾で沢山の友達ができて、相手の話を聞きたい、相手のことを理解したいと思う内に、ふと、英語は意思疎通の手段の1つにすぎないのだということに気付かされました。けれどその、世界共通の手段になれるということは、疑いようもなく、他の何事にも変えられない英語の偉大な特徴です。台湾の友達と楽しい時間を一緒に過ごすうちに、こんなにも文化が違うのに、こんなにも生活が違うのに、こんなにも言葉が違うのに、英語を使えば、考えていることを、楽しいという気持ちを共有できるのかと嬉しくて堪らなかったです。

共通の手段である英語というものの素晴らしさをしみじみと感じ、英語を学んでいてよかったと、心から感じた瞬間でした。

だから台湾は、私にとって海外アドクリをするのに最高の土地であり、この4月は私にとって文字通り最高の経験でした。台湾で、そしてこのTMUで、実習をさせて頂けたこと、向こうでの出会い、みんなと過ごした日々、その全てが私にとって完璧で完全で、これ以上の別の形を想像できません。この実習は私に、言語面、医学面、生活面、人間関係……その他挙げきれない程たくさんの面で、私に刺激と気づきを与えてくれました。

最後に、全ての工程を終えて感じたことは、

③頂いた縁を続かせるのにInstagramはとても有用で重宝するということ。

遠く離れた土地にいても相手が何をしているのか知ることが出来るツールがあることがどんなにありがたいことか、今しみじみと実感しています。

この3つが、この留学を終えて、海外に興味があるかないかに関わらず全ての人に伝えたいと思ったことです。私は本当にluckyで、TMUの学生と関わる機会を多く頂いただけでなく、大医の同回生や国立台湾大学の学生さん、そして日本の他の学校から来ている学生さん達とお出掛けする機会もたくさん頂きました。そしてそれはひとえに、数え切れないほどたくさんの人のおかげです。

当初、海外研修の枠から外れてしまった私を、追加枠で受け入れてくれるよう向こうの大学に掛け合ってくださいました先生に心からの感謝を申し上げます。一度は諦めた留学に行かせて頂いたことが、これからの人生でも、不可能だと感じることに最善を尽くして挑戦し続けたいという強い思いにもつながりました。

また、いろいろな手続きに不慣れな私を支えてくださった国際交流センターの方々に感謝の思いでいっぱいです。ご迷惑をおかけしたことも多々ありましたが、この留学は私にとって本当にかげがえのない経験になったと深く感じています。

海外研修に行かせてくれた両親に頭が上がりません。いろんなイベントに誘ってくれ一緒に遊んでくれた、優しくて個性的な大医の台湾メンバーが大好きです。多くのTMUの学生と国立台湾大学の学生、他の大学から来た留学生、向こうで出会った全ての人々に心から感謝します。

台湾にいる時からたくさんの人に、本当に感謝の思いでいっぱい、なんとどうお礼をすればいいのかわかりません。ただ、この経験が、本当に人生を変える経験だったよと言えるように、そしてここで学んだ沢山のことを活かして、これからよりいっそう勉学に励んで、よりよい医師になれるように努力してゆきたいです。

1枚目の写真は、最終日3日前にTMUの学生と一緒に台北101の展望台からみた台北市の風景です。ここに写るいくつかの店で私はご飯を食べて、友人とのかけがえのない時間を過ごしたのだと思うと、思い出がたくさん散りばめられているように感じて、大学周辺の写真を見ただけでいつも目頭が熱くなってしまいます。でも同時に、ただの台北101周辺の写真が、私にとって大きな意味を持つことをとても嬉しく思います。

私はこれからもずっと、この1ヶ月の出来事とそこで感じたことを、何度も思い出して、忘れないようにしたいです。



この1ヶ月で撮った写真は2000枚くらいあったはずなんですが、じっくり探しても病院の写真がこの1枚だけしかなくて今とても後悔しています。



お昼ご飯の後、大学の近くにある惠安公園で、買って来たタピオカを飲みました。台北101が見える見晴らしのいい公園で、めちゃくちゃQOLが上がります。



救急科の実習を回った時、週に2-3回、先生がタピオカサイズを買ってくれました。台湾では多分ペットボトルのお茶くらいの勢いでタピオカ飲んでます。



淡水に遊びに行った後の晩御飯。

韓国カソリック大学校での実習を通して

医学部 6年生

日下部充美

派遣校: 韓国カソリック大学校

実習期間: 2023年4月3日～4月28日

私は2023年4月3日から4月28日までの4週間、韓国カソリック大学校・ソウル聖母病院で実習をさせていただきました。初めての海外長期滞在、そして海外での病院実習。この経験は私にとって非常に大きな学びとなりました。この感想文を通して私が学んだこと、感じたことをお伝えしたいと思います。

韓国カソリック大学校・ソウル聖母病院はソウル特別市の江南区にある大学病院です。江南区という都市部にありながら病院はとても規模が大きく、本館には22階ものフロアがあります。いくつかの韓国ドラマのロケ地としても使われており、非常に綺麗な病院です。病院の吹き抜けのロビーに初めて入った時は思わず感動してしまいました。

最初の2週間は形成外科で実習をさせていただきました。形成外科の実習は朝7時過ぎに始まります。医局に行くと、レジデントの先生方が患者さんについてお話をされていて、7時半からzoomで抄読会があり、それが終わると教授の先生と回診を行います。その後のスケジュールとしては外来見学か手術見学になるのですが、私は手術に興味があることを最初にお伝えしたので、手術を中心に見学させていただきました。形成外科は2つの手術室を使用するので、どちらか見たい方の手術室に入って見学をします。色々な手術を見学させていただいたのですが、そのうち半数近くが乳房再建の手術でした。日本では乳房再建の手術は週に1件か2件くらいだったのですが、ソウル聖母病院ではほとんど毎日乳房再建の手術があり、病院としての規模の大きさが伺えました。また、日本の大学病院では目にする事のない美容の施術も稀にあり、非常に興味深かったです。

後半の2週間は救急で実習させていただきました。救急の実習は朝8時半に始まります。トリアージ室という、救急にきた患者さんをまずその部屋で診察しそこから検査に送ったり治療方針を決定したりと、名前の通りトリアージを行う部屋なのですがそこで見学をさせていただいたり、研修医の先生に付いてABGAなどの手技を見学させていただいたりしました。また、救急ではカソリック大学校(以下CMC)の学生が実習で回ってきていたので、初日はその学生達に混ぜてもらって、一緒にシミュレーションセンターで救急対応などのシミュレーション訓練もさせていただきました。

日本と同じく韓国にも一次、二次、三次救急といった区分があり、ソウル聖母病院は日本の二次救急にあたります。実習を通して感じたことは、韓国の救急は軽症の患者さんが多いということです。それはソウル聖母病院が二次救急だからということではなく、韓国の医療の体制に理由があるようです。韓国では大学病院のような規模の大きな病院と、小規模なローカルのクリニックの間の位置付けとなるような中規模の病院があまり存在しないため、患者さんは軽症であっても大学病院の救急に来ることが多いようです。日本だと大学病院の救急に行くのはよほど重症な場合であることが多いイメージだったので、このような規模が大きい病院に患者さんが歩いて来られているのを見て驚きました。

救急の体制だけでなく、日本と韓国は似ているようで違う点が他にもありました。

まず一番驚いたことは、ほとんどの先生が英語を流暢に話され、その内数名の先生はネイティブレベルで話されることです。韓国の医学部は、現在は日本と同じ6年制ですが、数年前まではアメリカのように4年制の大学を卒業してからさらに4年制のメディカルスクールに通うシステムも導入されていて、先生の中には4年制の大学に通ってる間に留学を経験された方もいらっしまったので、そういったことが理由としてあるようです。私は日常レベルの英会話ぐらいならできるという自信があったのですが、先生方の圧倒的な英語力を前にして、そんな自信は一瞬で消え去りました。

また、韓国では医学用語を英語で学びます。カルテを見せていただいたのですが、医学用語は全て英語で書かれていましたし、CMCの学生の症例発表に参加させていただいた時も、その発表スライドがほとんど英語で書かれていて驚きました。その学生が、患者さんに説明する時に自分は英語で覚えているけど患者さんには韓国語で伝えないといけないのでそれが難しい、と言っていたのがとても印象的でした。CMCの学生は非常に優秀で、症例発表のクオリティも非常に高く、先生に何か質問されても即座に答えていました。勤勉で真面目な学生の姿を目にし、自分も頑張らねばという想いにさせられ、それが今の勉強へのモチベーションにも繋がっています。

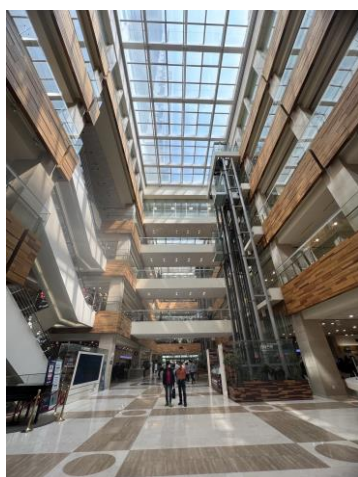
実習以外の日常生活としては、病院が都市部にあるので交通の便もとても良く、地下鉄やバスを駆使して色々な所へ行きました。遠くに行かなくても病院の最寄駅である高速バスターミナル駅も大きな駅で、新世界デパートもありますし地下には大きなショッピングモールもあります。実習終わりにCMCの学生がご飯に連れて行ってくれたり、救急のご飯会に参加させていただいたりもしました。病院がある江南というエリアも、ソウルでは高級住宅街に当たるので治安も良く、立地としては本当に最高でした

この実習が始まる前はコロナで数年間交換留学がストップしていたので、海外実習を経験された先輩のお話を直接お聞きすることなどができず、正直どのような実習になるのかあまりイメージできていませんでした。しかし、終わってみると思っていた以上の学びがあり、それと同時に今の自分を見つめ直す良い機会にもなりました。

海外の病院で実習をするということは、単に言語が違うだけの病院実習ではなく、その国ではどのような医療が提供されているのか、どのような医療の体制なのか、またその国の学生はどのように医学を学んでいるのかなど、新しい発見ばかりです。医療の違いで言えば、日本の病院実習では経験することのない症例を目にすることができますし、学生の医学教育に関して言えば、自分の勉強への取り組み方を改善するきっかけにもなります。この海外実習の経験が現在の自分、そして医師になった後も活かされていくことは言うまでもありません。海外実習に行ったら本当に良かったと思っています。

また、CMCの学生との交流は今回は救急を一緒に回った学生だけでしたが、コロナ以前は大阪医科薬科大学(以下OMPU)に来たCMCの学生が、そのあとCMCに来たOMPUの学生の世話をする、と言ったような交流があったようです。コロナで交換留学が途絶えていましたが、今回数年ぶりに私たちがCMCに行き、来年にはCMCの学生がOMPUに来ます。再開しつつあるこの交流を絶やさず、さらに強固なものになっていくよう、私も微力ながらお力添えさせていただけたらと思います。

最後に、今回のこの留学をサポートしてくださった国際交流センターの皆様、韓国カソリック大学の皆様には大変感謝しております。皆様のサポート無しではこの実習をやり遂げることはできませんでした。本当にありがとうございました。



韓国カソリック大学校実習と渡韓

医学部 6年生

谷口 遼

派遣校: 韓国カソリック大学校

実習期間: 2023年4月3日～4月28日

私は韓国ソウル市にあるセントマリア病院の救急科で4週間実習を行いました。この病院はカソリック大学校の附属病院で、韓国の様々な場所にあります。それだけこの大学と病院の規模が大きいということでもあり、病院自体は26～27階程で、病床数は約1400床あるということでした(大阪医科薬科大の附属病院は約800床)。

韓国では大学病院で診療を受けるのに紹介状等が必要ないため、日本の診療所やクリニックに行くような感覚で受診される方がおおく、またこの病院の救急科は基本的に1次～3次まですべての患者さんを診察するので患者数は膨大です。しかし、実際はそこまで忙しそうに見えませんでした。この理由は正直わかりませんが、その分、教授や先生方が我々留学生にも相手をしてくれる時間が多少なりともあったように感じます。私は将来海外で働きたいという思いがあり、海外では特に自分がどういう人間なのか、何をしたいのか、何ができるのかをアピールしなければならないと考えていました。だからこそ私は実習の初期から自分がどういう姿勢で実習に取り組み、どういったことがしたいのかを主張しました。それが功を奏し、最初の二週間は様々な手技を行うことができ、また前述のとおり、先生方も隙間時間に授業や雑談をくださったことで非常に有意義な時間を過ごすことができました。しかし三週目以降、上の先生の判断により海外実習生の侵襲的医療手技の禁止が言い渡され、我々実習生は見学のみとなることが増えました。それでも雑用でも何でもできることをやらせてもらうよう頼みこみ、面白い症例があれば見せてもらうよう動き回りました。先生方は親切な方が多く、特にある一人の教授にはお世話になりました。実習のことから生活面のことまで世話を焼いて下さり、感謝してもしきれないほどでした。この実習を通して学んだことはやはり海外という場で、自分という人間をいかに知ってもらうかアピールすることの重要性です。それが少し強引に思われたとしても何の印象にも残らないよりは数段良いと僕は感じました。また自分を主張するという事は、積極的にコミュニケーションを図ることにもつながります。もちろん相手の先生方が非常に親切で、留学生に対しても教育熱心であったということが大前提なのは言うまでもないですが、それでもここまで世話を焼いてくれ、気にかけてくださったのは、積極的な姿勢が多少なりとも寄与したのではないかと考えます。

セントマリア病院の外観



カソリック大学の学生とのALSの練習



セントマリア病院の食堂



実習後のカソリック大学生との交流



救急科の教授にごちそうになった韓国の刺身



ソウル国立大学校附属病院での実習: 異国で医学を深める

医学部 6年生

嶋田 聖

派遣校: ソウル国立大学校病院

実習期間: 2023年4月3日~4月28日

【ソウル国立大学校附属病院、韓国の医療体制について】

ソウル国立大学校附属病院は韓国の中心地であるソウルに位置する大規模な病院です。韓国では、初診を大学病院で希望する患者が非常に多く、その結果、連日外来は混雑しています。韓国の人口の約5人に1人がソウルに住んでいますが、ソウルには大学病院を含めて大規模な病院は4つしかありません。そのため、韓国在住の患者の6割以上が、これら4つの病院のいずれかを選ぶそうです。また、韓国も日本と同様に高齢社会が深刻化していますが、往診や訪問診療の体制は日本ほど整備されていません。このため、今後の医療体制には課題が残されています。

【ソウル国立大学校附属病院を選択した理由】

韓国は生体肝移植術の件数が世界的にも非常に多い国です。将来、外科医を目指す私は、最先端の生体肝移植術を見学するだけでなく、海外で活躍するためのキャリアプランを考えるため、肝胆膵外科で2週間の実習を行いました。また、癌治療に使用される薬にも興味があり、残りの2週間は腫瘍内科で実習しました。

【ソウル国立大学校附属病院で学んだこと、感じたこと】

・生体肝移植術について

ソウル国立大学校附属病院には肝移植術専門の診療科があり、年間100件もの生体肝移植術が行われています。さらに、さまざまな術式が用いられており、ドナーとレシピエントの両方に対してda Vinciを使用した腹腔鏡下生体肝移植術も世界で初めて行われた実績があります。私は実際に世界最先端の生体肝移植術を見学する機会を得て、手術の手際の良さやチームのコミュニケーション能力の高さ、そして教授の指導力に感銘を受けました。また、ここでの学びは大学の授業では習わない内容にも触れることができました。

・腫瘍内科について

腫瘍内科専門の病棟があり、韓国の終末期医療と保険制度について学ぶことができました。韓国では、患者さんの終末期医療や看取りを病院で行うケースが一般的です。「腫瘍内科は血液疾患など予後の悪い患者さんが多いため、将来的なトラブルを防ぐために、医師が患者さんやその家族に納得していただけるような説明をする必要があります。また、これは信頼を築くためにも重要です。」という指導を受けました。内科の先生方は、週に2回の勉強会、症例検討会、他科との合同カンファレンス、英語での発表会などで毎日忙しそうでした。カンファレンスでは、医師だけでなく、病理医、臨床検査技師、薬剤師なども参加し、意見を述べていました。病理医は細胞診や組織診の結果報告を行い、確定診断まで説明していました。CTの画像などは臨床検査技師が説明していました。薬剤師は処方された薬について医師の見解を求めていました。また、ソウル国立大学校附属病院ではがんセンターでの治験が盛んに行われています。腫瘍内科では、主にがんのドライバー遺伝子を調査し、それに対応する薬を使用する治療方法を取り入れています。

・学生の知識、英語力の高さ

韓国の医学生は5年次に、日本のクリクラと同様、1年間大学病院で実習しますが、彼らの医学知識と英語力には本当に驚かされました。彼らは当たり前のように医学英語を使い、日常会話も英語で行えます。基礎医学はもちろんのこと、手術の方法や患者の術前管理、術後管理、さらには韓国の診療ガイドラインについても詳しく知っていました。教授の英語での口頭試問にもスラスラと英語で答えることができました。私が知らないことについても、親切かつ丁寧に教えてくれました。韓国では医学関連の単語やそれに関連する動詞はすべて英語で書かれているため、韓国の医療従事者は皆さん英語が堪能でした。

【宿、食事、観光について】

・宿について

当初、私は大学内の寮を希望していましたが、現地の学生に寮について直接聞いたところ、すべての部屋が校内生で満室だと言われてしまいました。そのため、私は地下鉄の鍾路3街駅から北へ約400メートルのホテルに宿泊しました。

・食事について

大学内には患者さん向けの食事施設が充実しており、カフェ、ドーナツ屋、韓国料理屋、アイスクリーム屋など、さまざまな店がありました。その様子は日本のフードコートを思い起こさせるものでした。また、食堂もあり、昼食と夕食は食堂で3500ウォンで食べることができました。朝のカンファレンスや昼のカンファレンスに参加すると、軽食が無料で提供されるため、食事に困ることはありませんでした。私は腫瘍内科の医局員の方や外科の先生方にそれぞれ1回ずつご馳走になりました。韓国では食事のマナーが日本よりも厳格であり、特にお酒の席ではマナーが重視されるため、事前に調べておくことをお勧めします。

・観光について

公共交通機関ではバスが最も利便性が高く、距離に関係なく1200ウォンで利用することができます。病院本館の前にはバス停があり、徒歩1分で地下鉄の駅にも行けるため実習が終わった後に観光を楽しむことができました。大学の西側には世界遺産の昌徳宮があり、東には東大門、北には大学町の商店街、南には鍾路区の屋台があり、とても活気がありました。

【海外でアドバンスト・クリニカルクラークシップ実習を希望する方へ】

海外での実習のメリットは、異国の地で日本語が通じない状況で自分自身で主体的に行動し、直面するさまざまな問題を解決し学ぶことです。私も最初の1週間は苦勞しました。自分の意見を完璧に英語で表現できないことにもどかしさを感じたり、先生から誘っていただいたお酒の席で失礼な行動をしてしまったり、劣等感を感じることもありました。しかし、これらの失敗から学び、改善策を考え、態度や行動を改めました。次第に現地の生活にも慣れていく中で、ある日、自分が勉強していた英語や医学知識を使ってうまくコミュニケーションが取れるようになったとき、非常に達成感を感じました。現地の医師から「君の英語はわかりやすいね」と言われたときは、本当に嬉しかったし、韓国を訪れて本当に良かったと感じました。もしアドクリでどこの国に行くか迷っている人がいるなら、ぜひ韓国を選択してほしいです。韓国語が全くわからなくても、医学の共通言語は英語だということを改めて実感できます。トラブルに巻き込まれても意欲を見せれば必ず助けてくれる人が現れます。最後に、この貴重な機会を提供してくださった国際交流センターやPA会の方々、そして家族に感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。



ソウル国立大学校附属病院の実習を終えて

医学部 6年生

姫路 修兵

派遣校:ソウル国立大学校病院

実習期間:2023年4月3日~4月28日

私は6年の4月に1ヶ月間ソウル国立大学校附属病院の臨床実習に参加させていただきました。前半2週間は救急科、後半2週間は移植外科を選択しました。

〈救急科〉

ソウル国立大学校の救急科の実習では、小児救急・ER・ICU病棟と大きく3つに分かれて2週間ローテーションし、追加で火曜日と木曜日は朝8時頃からのカンファレンスに参加させていただきました。

救急外来では副鼻腔炎などのcommon diseaseを、病棟ではALSといった重症疾患の管理を学ぶことができました。ER救急には、心停止や交通外傷が頻りに運ばれてきており、その場で救命処置をみることができ、幅広く韓国の医療に触れることができました。基本的にどの先生からも英語で丁寧に状況を伝えていただけるので、韓国語に苦労することは多いわけではありませんでした。どの分野においても日本との医療行為に大きな違いはなかったですが、日本より少子化が進んでいる韓国では小児救急のあり方が懸念されており、現場でも実際に感じることは多くありました。

カンファレンスでは、実際の救急患者についての議論や最近の救急トピックについて焦点を当てたプレゼンが行われていました。多くがスライドは英語で書かれていますが、話は韓国語で行われるため、理解できないことも多々ありましたが、理解できる範囲でのカンファの出席を歓迎されたため、有意義に時間を送ることができました。また、そのカンファにでるキンパとバーガー、コーヒーが朝一の体に沁みていたのも一つの思い出です。

私の臨床実習期間と同じタイミングでアメリカからも留学生が2人参加していました。一つの部屋に私含めて3人の椅子と机がそれぞれ用意され、そこで暇な時間を自由に過ごし、そのまま外へご飯に行くことも多く、アメリカの医療制度からそこでのプライベートな話まですることができました。医療制度に関しては、ある程度人口が密集している日本とは違って、広大な土地をもつアメリカの救急医療の難しさを認識しました。また2週間ネイティブ英語を浴び、自分の英語の習得不足を実感しましたが、これからの英語に対する意識の向上にも繋がりました。

〈移植外科〉

移植外科では、毎日行われる手術の見学を行い、手術後にカンファレンスに参加するというスケジュールでした。手術内容に関しては、腎移植のほかに静脈瘤などの外科的血管治療も行っております。腎移植ではドナーとレシピエントの手術が一連の流れで行われます。日本ではあまりみない臓器移植を見ることができ、その迅速さと細やかさには驚きました。移植医療のカンファレンスでは、英語で行われ、論文が読まれたり手術後治療計画に関して議論されたりしていました。日常的に英語の論文を取り上げ、その情報をそのまま英語で議論している姿は印象的で、普段から医療を英語で触れる意識の高さも日本ではあまり見ない一面でした。

手術中は、厳格な雰囲気を保ち、最初は私もその雰囲気に疎むこともありましたが、移植外科の飲み会ではとてもフランクにお話をいただき、その先生方のプロフェッショナルな部分を感じました。

医学部 臨床実習プログラム(海外)_派遣学生の声

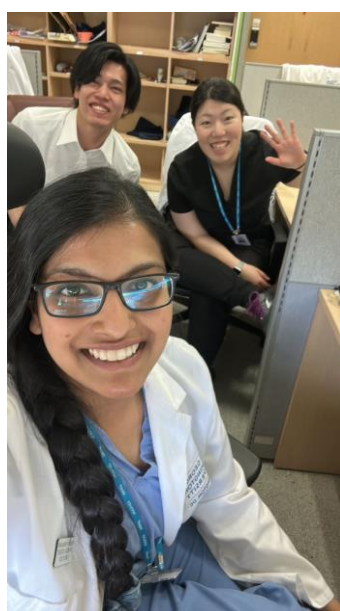
〈私生活に関して〉

オーストリアや中国、アフガニスタンなどと幅広い他国からの留学生も今回の臨床実習に参加しており、ご飯会などを開いて、それぞれの医療の違いや私生活に関して話すことができました。他にも現地のソウル国立大学校の学生や日本の他大学の留学生とも出会いがあり、国際的な交流を通して、自分の考え方の幅を広げるいい経験になりました。

〈最後に〉

今回、1ヶ月のソウル国立大学校での実習を通して、様々な出会いを経験し、医療や文化、考え方の多様性を学び、国際医療のみならず国際交流に対する意識の変化もありました。この経験を糧に、視野を広く、既存の考えに囚われず、国際的な医療の発展に貢献できるようにこれからも日々精進していきたいと思えます。

最後になりますが、留学のご支援をくださった中治さんをはじめとする国際交流センターの皆さま、ソウル国立大学校附属病院でお世話になりました方々、関わっていただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。





Annual Report 2023

医学部 臨床実習プログラム（海外）派遣学生の声

大阪医科薬科大学
国際交流センター

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2番7号
TEL : 072-683-1221 (代表)

Osaka Medical and Pharmaceutical University

Global Center

2-7 Daigaku-machi, Takatsuki City Osaka,
569-8686, JAPAN

